

第四章 創造と宇宙論

稲垣先生のトマスの「創造」概念の注釈

「救い」は神の呼びかけ、招きに人間が自由に、信仰で応えることによって成就
しかし、「創造」は、神の知恵と愛による業であり、存在そのものである神が、
自らの存在を分与し、自らの存在と生命の豊かさへの参与を他者に許すことである

1～6 第一段階「神は存在する」という根源的肯定

1) アリストテレスの「第一原因」

- (1) 第一原因とは、すべての存在するものを
存在せしめる原因でありつつ、自らは他の原因に依存することのない第一の存在を意味する
- (2) 全宇宙のすべての運動・変化を生ぜしめつつ
自らは他の何ものによっても動かされない動者(第一原因、神)

2) トマスの神の業としての「創造」概念

- (1) 因果性A→第一原因である神への知的探求(結果から第一原因へ)
- (2) 因果性B→因果性Aと逆の方向/第一原因(神)から結果へという「創造」の基本概念
- (3) 因果性Aと因果性Bの相違

3) カントは「神存在の宇宙論的証明は不可能」

- (1) 感覚界・可能的経験の領域内を超越した本質レベルの「何かである」の特殊規定を含まない「存在」言
説は空虚であり錯覚でしかない(バークリーの「在る」とは知覚されることである)
- (2) カントは古典的形而上学の「一」「真」「善」「美」といった特殊規定を超越する
アイデアの「存在」も否定することになる

4) トマスの『神学大全』の「存在の歴史から解明」

第44問「第一質量は神によって生ぜしめられたか」

- (1) 存在と言えば感覚で捉えられる物体だけ
 - (2) 存在を知性によって、実体的形相と質量を区別し、各物体の変化は、
各本質の形相に即して生じていると認識
 - (3) 第一原因によるすべての事物の存在の原因である第一質量の創造
- #### 5) トマスの知性的認識のレベルのさらなる「知的冒険・知的探求の勧め」
- (1) 不可知な本質レベルの「何かである」の認識/事物の本質の認識
 - (2) すべての存在するものを包括する普遍的「存在」概念
 - (3) 存在の全体的・普遍的な超・可知的な「究極の存在(神)」の認識

まとめ 第一原因(神)による「創造(因果性B)」の名目的定義

「創造」の概念の前提の全体的普遍的「存在」理解

7～10 第二段階—哲学的・形而上学的「創造」概念

1) 信仰を前提とした神学的概念との違い

世界の始まりという「無からの創造」は神自身の働き・行為である

- 「三位一体」「受肉」「十字架の死と復活」と同じく神の本質とかかわる神秘
- 2) 哲学的・形而上学的「創造」概念の形成される「場 (人間の経験する事物)」
創造主 (The Creator—事物の存在の根源—) への何らかの関係する「場」
 - 3) その「場」における人間知性による極限までの思考努力・知的探求
(ex 感覚的想像力でなく数学的想像力)
 - 4) 神学的思考努力と哲学的・形而上学的思考努力の内的緊張の追求
 - 5) 2つの内的緊張によって「第一根源 (神) による存在全体の普遍的流出」を論証
 - 6) 「関係としての創造」は「神の創造」の働きを意味しない
「神の創造」の働きは信仰によって肯定される真理

1 1 ~ 1 3 第三段階—神学的「創造」概念

- 1) 哲学的・形而上学的「創造」概念の思考努力の意義
人間の心を神的創造という現実に対しふさわしい仕方で開くためである
- 2) 哲学的「創造」理解は世界 (宇宙) が、そして、人間一人ひとりが、常に第一根源 (神) に依存していること、絶対的依存の関係を離れてすべては虚無であることを示している
- 3) 「創造主への依存の関係を離れては全くの虚無」
この存在論的「地位・場」の自覚は今日の一瞬の生き方に、根本的決断を迫るはず
人間一人ひとりの究極の関心、それは「救い」に関わる問題

- 1) トマスにとっての神学は、「教える神 (聖書)」にもとづく啓示神学
(vs 人間理性で認識する自然神学 (形而上学))

「創造」は、神の働きであり、神の知恵と愛の業の枠組みで理解すべき

- 5) 「三位一体」の神秘と事物 (万物) の創造—人間の参与—
 - (1) 神は神の知恵の御言 (みことば) というペルソナと聖霊というペルソナの恵み深い愛によって万物を創造された
 - (2) 「三位一体」の神の認識は
人類の救いが、神の御子である言 (ことば) の受肉と聖霊の賜物によって成就された
 - (3) 父なる神のペルソナが言 (ことば) である御子のペルソナと愛である聖霊のペルソナによって世界 (宇宙・万物) をつくりだした
 - (4) 存在そのものである神が
自らの存在を分与し自らの存在と生命の豊かさへの参与を他者に許すことである

1 4. 現代に対する挑戦とは

- 1) 世界 (宇宙・万物) の創造を存在の全体的・普遍的認識をめざして徹底した知的探求をすべき
- 2) 哲学的・形而上学的「創造」の知的探求は創造主への何らかの関係する「場」として認識すべき
- 3) 創造は「三位一体」の神の知恵と愛の働きであり、
人間はそこに心を開き神自らの存在の究極の意味を読み取ることである

まとめ

パスカルの「神から離れて在る人間の悲惨さ、神と共なる人間の偉大さ」